

本能寺

頼

山陽

本能寺溝は幾尺なるぞ

吾大事を就すは今夕に在り

菱粽手に在り菱を併せて食

四簷の梅雨天墨の如し

老の坂西に去れば備中の道

鞭を揚げて東を指す天猶早

吾が敵は正に本能寺に在り

敵は備中に在り汝能く備えよ

【作者】 頼山陽（一七八〇〜一八三二年）（安永9年〜、天保3年）・名は襄（のぼる）、字は子成（しせい）、号は山陽。大坂江戸堀に生まれた。父春水は安芸藩の儒者。七歳の時叔父杏坪について書を読み、十八歳で江戸に遊学した。二十一歳で京都に走り、脱藩の罪により幽閉される。のち各地を遊歴し、天保三年九月病のため没す。年五十三歳。著書に「日本外史」「日本政記」「日本楽府（がふ）」などがある。

【語釈】 *本能寺…京都市中京区寺町にある法華宗本山 明智光秀が主君織田信長をおそった「本能寺の変」で有名 ただし当時の本能寺は現在地よりやや位置を異にする。

- *大 事…信長の命による備中高松城を攻めることをせず 信長を撃つために本能寺を攻撃すること
- *菱 粽…ちまき *四 簷…軒の周囲 「簷」はひさし。 *老 阪…京都と亀岡を結ぶ峠。
- *備 中…現在の岡山市高松にあつた備中高松城 羽柴秀吉の「水攻め」で有名。

【通釈】 本能寺の溝の深さは一体どのくらいあるのだろうか、その本能寺にいる信長を撃つのは今夕が好機である。

はやる心の光秀はちまきを葉ごと食べてしまい、おりから梅雨が墨を流したように激しく降り、あたりは真つ暗になった。
老の阪から西へ向かえば、信長の命令どおり備中への道であるが、まだ夜の明けない早朝、鞭をあげて東へ向かったのである。

この時光秀は「我が敵は本能寺にあり」と部下に対して絶叫したが、光秀の本当の敵は備中にいる秀吉であり、これに対して十分な備えをしなければいけなかったのである。（と光秀を戒めている）

【備考】 この詩は頼山陽が日本国史を詠じた「日本楽府」六十六曲の第六十一曲である。